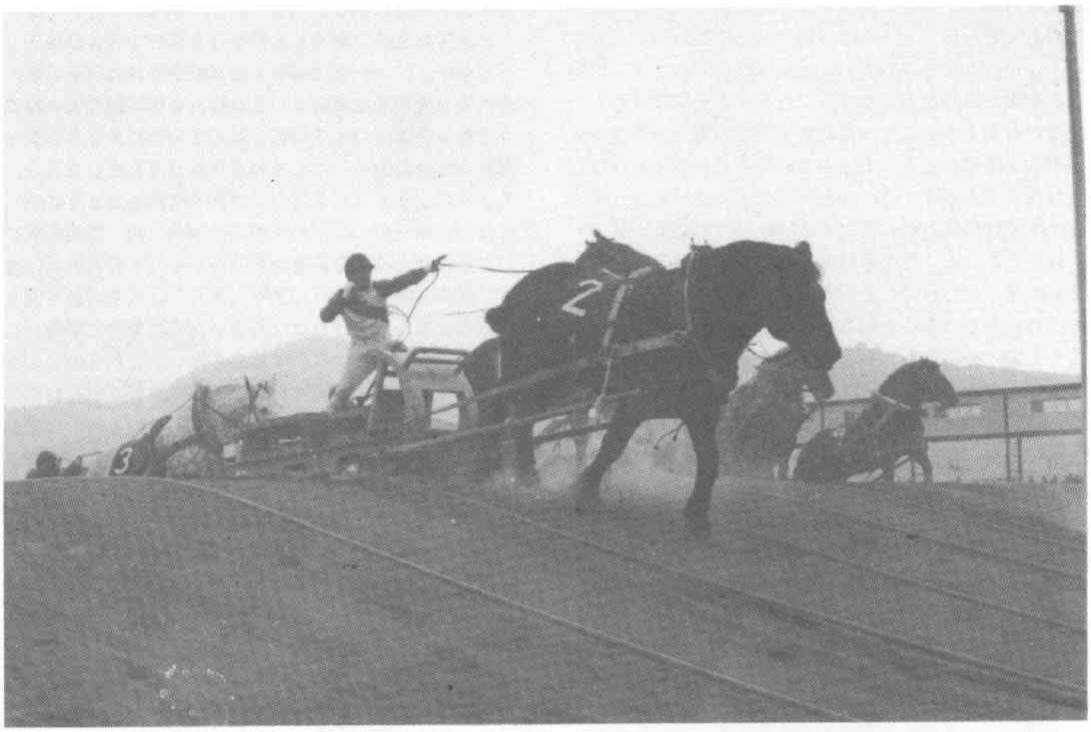
かぐらおか

第 25 号
昭和55年10月1日
編集 旭川医科大学
厚生補導委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課

（題字は山田守英学長）



旭川競馬場

内　　容

思考しようとする心を
鈴をならしてつんぼにする ……金沢　徹… 2
海外だより　ドイツの思い出
〈ある小さな町で－キルヒベルク・アム・ヴェクセルー〉 ……岡田　雅勝… 3
新任教官紹介 …… 4
就任にあたって ……小野　一幸… 4
小野教授のこと ……松嶋　少二… 4
就任にあたって ……片桐　一… 4
片桐教授を迎えて ……森　茂美… 5
研究室紹介 ……関口　定美… 5
課外活動報告 ……高橋　康二… 6
第6回医大祭 ……長谷　秀之… 6
第27回北海道地区大学体育大会 …… 7
第23回東日本医科学生総合体育大会 …… 7
バレーボール講習会 …… 8
訃　報 …… 8
窓　外 ……笹森　秀雄… 8

思考しようとする心を鈴をならしてつんぼにする

金　沢　　徹

私は自分がつとめているこの旭川医大が好きである。医大からみるとあまり働きのない私が気に入らないとしてももっともだから、あるいはこれは片想いかもしれないが、それならそれでよい。医大が好きなのはほかに特別な理由があるからではなく、ただこの大学がいなかにあるからである。いなかには気ぜわしい現代では得がたい静寂と孤独がある。大学のなかにもそれを求めれば得られるような気がする。かってパスツールやキュリーの時代までは研究の世界にはある種の静けさとロマンチックな夢があった。現代の巨大化した科学の世界では一見それが全く失われてしまったかのようにみえる。しかし本当はそうではないと思う。現代でもやはり研究は研究するものの心のなかにひとり育つ夢であり理想である。そしてその夢が、より純粋で、より個性的であるためには、静寂と孤独が必要である。

私はさる大都会の大学で長い間研究生活を過した。そこにはぬきんでてすぐれた研究者がいくにんも身近におられて力強く研究指導にあたられていた。私もそこで多くのことを学ぶことができた。しかし、大都会では喧噪と情報過多と誇大宣伝はさけられない。それが研究室のなかにも色濃く浸透していて、研究の純度と独自性に好ましくない影響を与えていたように思う。もともと外から流れ込む情報は自分が自分のあたまで考えたものではないから、多量の情報が絶え間なく不可避的に流れ込む状態はとくにまだあまり強力とは言えない若い研究者にとって必ずしも望ましいことではない。そのような状態が長く続くと、強烈な個性をもつ少数の例外者を除いて、しだいに情報を受け身にとり入れることに慣らされ、研究するものにとって一番大切な、自分の心から自然に湧きでる欲求にうながされて研究にとりくむ姿勢がいつしか薄れていく。私は若い人達にこのような例を少なからずみたように思う。

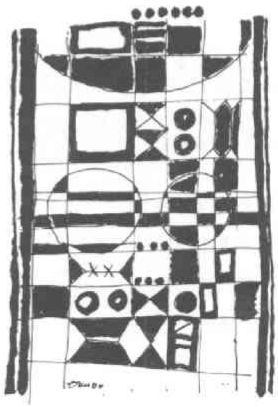
さいわい、われわれの医大は北海道第二の都市にあるとは言え、中央から遠く離れて大雪連峰を望む大自然にかこまれた静かな田園地帯に位置している。ここまでは大都会の喧噪も虚飾も及ばない。静寂と孤独のうちに研究対象を熟視し、深くその本質について思索するにはこのうえなく適した環境にある。現代ではもはや失われたと思われた研究の世界でのロマンチズムもあるいはこの田園都市の大学では可能なように思われるのである。

私のように、未熟で平凡な研究者が研究環境はかくあるべしと断言するのは、勿論あまりにも笑止である。だから私はここで学生時代から敬愛してやまないピエール・キュリーの言葉を引用したい。

「思考しようとする心を鈴をならしてつんぼにする」と題して、……私の弱いことは確かだけれども、私のあたまをあらゆる風のまにまにゆれる柳の枝のように動かされないようにするには、私のまわりにあるものを全部動かないようにしてしまわなければならないだろう。そしてちょうどうなりを立てて回っているこまのように、自分の運動そのものが私を周囲の事物に対して無感覚にしてくれなければならない。……そしてわれわれは食べ、飲み、眠り、怠け、愛し、さらには人生の最も優しいものにもふれなければならないようにできている。しかもそれらのものに負けてはならない。これらのことをしながら、一方ではわれわれが身をささげている自然の惰性にまかせない思索生活が、われわれのあわれな頭脳のなかで支配的な地位を占めて、その非人情な活躍をつづけるようにしておかねばならない。そしてわれわれは人生から夢をつくり、また夢から人生をつくらねばならない。……

このピエール・キュリーの描いたものが私の理想の研究生活であり、またそれに必要な研究環境である。大都会の大学には勿論多くのすぐれた面がある。しかし、いなかの大学には研究の純粋さと美しさを育てはぐくむ静かな田園がある。私は大都会の大学がもつ喧噪と虚飾がわれわれの美しい医大にもちこまれないことを切に望んでいる。

（生化学第二講座　教授）



＊海外だより＊

ドイツの思い出

〈ある小さな町で
―キルヒベルク・アム・ヴェクセル―〉

岡　田　雅　勝

私は今キルヒベルク〔ウィーンから80キロ離れた小さな町〕の宿で書いています。ここには学会〔国際ウィトゲンシュタイン・シンポジュウム〕参加のために来ました。宿といっても学会で世話してくれた民宿です。ここはキルヒベルクという名に相応しい、四方が山々に囲まれ、教会を中心に民家が立ち並んで、緑に映えた牧歌的な風景は絵さながらといえます。道行く人々の微笑みをたたえた挨拶、家々の窓から咲き乱れた花々、古い木の垣根、道端のマリア像やキリストの十字架像、軒下に積まれた薪、薪割りをしている主婦もみられます。ここには鉄道もなく、ここより15キロ離れた駅から1日に何本かのバスの便があるだけです。ですから、交通の便の悪い、山の中の小さな小さな町で国際学会が開かれ、世界各国から哲学者たちが集まるのは一寸奇異な感じさえいたします。およそ二百数十名が参加していますが、それを収容する会場は小学校です。この小学校は7・8年前に建てられたのですが、内装は全て木造りで、山の風景に調和した素敵な建物です〔この建物を学会中に、学会センターと呼んでいます。ついでですが、事務連絡所は「ポスト(昔の駅亭の意)」という食堂兼宿屋です〕。小高い丘にある校庭には参加者の国旗が立てられ20数本あります。たまたま日本からは私1人の参加になりましたが、それでも日の丸の旗もみられました。町挙って歓迎で至るところで丁寧な挨拶を受けます。開会式には村長さんの挨拶もありました。ところで、どうしてこの地に国際学会が開かれるようになったのかについて触れてみたいとおもいます。

現代哲学で最も影響力のある1人ウィトゲンシュタインという哲学者がこの地で小学校の先生をしていたことがあったのですが、その思い出の地アドルフ・ヒューブナー〔現在オーストリ・ウィトゲンシュタイン学会長〕の努力があってウィトゲンシュタイン・ドキュメント館が開館（教会の建物の1部）され、オーストリ・ウィトゲンシュタイン学会がつくられたことが国際学会の基になっています。ところで、ウィトゲンシュタインがこの地で小学校の先生をしたのは、かれが「哲学論理論考（トラクテータス）」という現代哲学（特に分析哲学）に決定的な影響を与えた書物を書いてしまった後のことなのです。かれはその書物で自然科学によって把握された世界を論理的に表現し、それによって表現しえないことについては沈黙を促したのです。かれは書き終えたとき、〈ここに書かれていることが大切だ〉と述べていますが、それはどうやら価値問題、倫理の問題だったのです。それがかれの教師志望という形で実践されたのでした。かれはキルヒベルク（その近郊を含む）で科学では論じえない価値・倫理の重要さを実践で示そうとしたのでした。ヒューブナー氏の努力はウィトゲンシュタインのこうした意志を受け継ぐことにあったのでしょうか。都会に住み、科学の基礎づけをし、論理に論理を重ね分析哲学に没頭している人々をこの地に招待し、ウィトゲンシュタインの真意を人々に問うのは真に哲学的な企てだといえそうです。

いま最も重要な課題のひとつはやはり価値倫理のようにおもわれます。こちらに来て、現代の鋭い感受性によって表現された作品〔それが絵画であれ、写真であれ、彫刻であれ、その他のものであれ〕に幾つか触れる機会をえたのですが、そこに表現されているのは機械及び情報に支配されたマス人間、現代産業によって生みだされる巨大な虚物、自然の喪失とすっかり萎びてしまった生殖と奇異なる生命体の描出等々にみえてなりません。また他方、それに対処するかのように環境汚染、生態の諸々の問題、福祉的な政策、そして人間の価値、倫理の問題について多角的に論じられているのに接しますし、またそれについて沢山の書物も出版されているのもみかけます。人々は確かに自分たちの生命を脅かすものの正体を意識していますし、それに対して具体的な方策を考えているのは確かなのです。しかし、解決への端初を見い出したといえるのでしょうか。

ところで、このシンポジュウムのテーマは〈倫理〉です。このテーマは前述の現代の状況を意識して選ばれたのだと思います。現代の倫理学は実に多角的に諸科学の成果をとり入れ、ひとつの科学として、別ないい方をすれば〈メタ倫理学〉としての学の建設に向かっているようなのです。ちなみに今回の学会でも、それが、義務論理、ゲーム理論、意志決定理論、社会法理論、倫理的情緒理論、規範理論、価値理論、生態理論、社会道徳論、医学倫理、行為理論等々というかたちで提出され、論議を呼んでいます。しかし、これらのことはなにもウィトゲンシュタイン学会でなくても論じられていることなのです。ウィトゲンシュタイン学会の意義は、単に科学としての倫理や論理を述べることにあるのではなく、科学の根拠を問い、それを批判検討し、人間にとっての価値とは何かを根本から問うことにあるようにおもわれます。

今日ようやく第1日目が終えたばかりですが、活発な議論にすっかり魅せられました。あと6日間続きます。キルヒベルクの牧歌的な風景への招待はどうやらドイツ留学のしめくくりとして私に人間への問いをまた改めて問わす強力な刺激となっているようです。（1980年8月25日、キルヒベルク・アム・ヴェクセルにて）

（哲学　助教授）

新任教官紹介

昭和55年5月16日付けで解剖学第一講座に小野教授、昭和55年6月16日付けで病理学第二講座に片桐教授がそれぞれ就任されました。両教官はすでに教育研究に当たられ講座の充実を図られていますが、本誌では御本人から挨拶をいただくとともに、親しい教官から御紹介いただくこととしました。新任教官の教育研究方針を理解する一助としてください。

（学　生　課）

就任にあたって

■ 解剖学第一講座 ■　　小野　一幸

5月に赴任してから4ケ月になろうとしております。着任直後から早急に処理しなければならないことが意外に多く、忙しかったせいか長い間本学にいたのではないかとさえ感じる今日この頃です。好学の気風の極めて盛んな本学において勉強させていただく機会を得ましたことは光栄に存じますとともに、仲西忠之教授のご努力と教室員の並々ならぬご協力によって作りあげられました解剖学第一講座をお引受けし、責任の重大さを痛感致しております。

ご承知の通り、解剖学の教育には解剖体が不可欠でありますが解剖体は全国的に不足、かつ減少の傾向にあります。夏期休暇中、解剖体収集の為のキャンペーンを行いました。山田学長、並木教授、松嶋教授にご一緒させていただき、また清水、竹光、宮岸の各教授のご支援を仰ぎました。先生方のご好意、心から感謝致します。キャンペーンで多くの人々にお会いし、また北海道北部を見分して地域性、人情等勉強させていただきました。今後の解剖体収集活動に役立たせたいと思っております。

私の専攻分野は電子顕微鏡レベルでの細胞化学的研究であります。現在、主に消化器を材料として研究しておりますが、泌尿生殖器や内分泌器も扱ってまいりました。私は細胞の微細構造を観察すると同時に、その構造を損うことなく細胞における物質の局在をも検討したいのであります。臨床を含む各教室の特徴を生かした細胞化学的研究が若い研究者に興味が持たれ、本学で盛んになることを夢みております。

ご縁があって本学にまいりました。何とぞよろしくご指導、ご鞭達のほどをお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

（解剖学第一講座　教授）

小野教授のこと

■ 解剖学第二講座 ■　　松嶋　少二

私は解剖学会で小野教授の御講演を拝聴したことはこれまでに何度もあったが、直接お会いしたのは本年4月24日が最初である。その日、私は、旭川医大解剖学第一講座教授に内定され、着任される前に本学を視察に来られた先生を旭川駅にお出迎えした。先生は、やや細めの身体にグレーのスーツ（ダブルであったように思う）を着こなし、いかにも紳士然としておられた。国語辞典によれば、紳士とは品格があって礼儀正しい男子とある。まさに先生は紳士そのものである。その日以来、私は先生と今日までおつき合いさせていただいているが、先生の仕事に対する熱心さやねばり強さには敬服させられる。先生は以前は内分泌器官の研究をされていたが、最近では光学顕微鏡や電子顕微境レベルの組織化学や走査型電子顕微鏡などを用いた消化管の形態学的研究を精力的に進めておられる。先生の御研究が旭川においてさらに発展されることを望んでいる。

先生は岩手県でお生れになり、以後本学に移られるまで東北でお過ごしになったと聞いている。東北と北海道では生活環境などの点で異なる点も多いと思われるが、一日も早く北海道の生活にお馴れになられるよう願っている。先生は北海道の冬の寒さを恐れておられるようである。幸い、先生は宿舎で私どもの所のすぐ上に住んでおられるので、寒くなったらどんどん下から暖めようと思っている。

（解剖学第二講座　教授）

就任に当たって

■ 病理学第二講座 ■　　片桐　一

今回はからずも病理学第二講座を担当することになりました。1974年に国立がんセンター研究所から当大学に転任し、前教授板倉先生指導のもとに第二病理学教室の創設に加わって来ました。これまで育てて来た教室にあって、さらに新しい教室の発展に向けて仕事をすすめ得ることを喜びとしております。この6年間、研究面においてはヒトの免疫遺伝学の研究をすすめて来ました。教室創設当初に我々の明らかにした新しい白血球抗原は、ヒト免疫応答遺伝子と結びついて種々の免疫異常症の発症機構の解析に応用されようとしています。当然これ迄の研究の流れの上にたちヒト細胞膜抗原とその遺伝子支配の関係又実験動物で得られた免疫遺伝学領域の現象がいかに医学に応用されるかを当面の教室の研究領域としていきたいと思っています。

真理の追求と言う研究、人を対象とする教育そして臨床に直結する生検、部検と言う routine work は教室の三本柱であり、これらのどれをとっても我々の大きな課題であります。現教室の力を集合して、これらの柱を balance をとりながら成長させ、明日の科学へ向って誠意努力していく所存であります。

（病理学第二講座　教授）

片桐教授を迎えて

■ 生理学第二講座 ■　　森　茂美

片桐先生がこのたび教授に昇任されたこと、二十数年前医学を一緒に学んだ同級生として、心から喜ばしく思っています。ここでは敢えて片桐君と呼ばせて頂きますが、彼のイメージとして最初に頭に浮んでくるのは、沈着、果敢という言葉でしょう。彼を医学部学生時代から知るものとして、この二つの言葉が現在に至る彼の scientific attitude を明確に示していると言うことができます。常に思慮深く、そして全力をあげて未知なるものの解明に取組んできたのが彼です。

片桐君は別名〝カタさん〟とも私共の間で呼ばれてきました。そしてその言葉の中には、人間同志の信頼と尊敬が強く含まれてきました。真理を探究する科学者として重要な沈着、果敢さと共に、科学を志向する人間が決して忘れてはならない、心の暖かさを別けへだてなく全ての人に持ち続けてきたのが彼です。彼から教えられたことも数多くありました。

病理学者として、既に優れた研究成果を世界に問うている片桐君が、沈着、果敢、愛情の三つを基盤とし、さらに私共が建設してきた旭川医科大学を土壌として、大きく成長していかれることについては、疑いの余地がありません。

初期の建設過程を終了し、あらゆる面で充実期に向かおうとしている現在、研究面のみならず、教育に全身の情熱を傾けている片桐君を、私共の同僚教授として迎えることができたことに限りない力強さを感じています。

（生理学第二講座　教授）

研究室紹介

■ 外科学第二講座 ■　　関口　定美

本学も今や第3期生の卒業が間近になっているが、教室の構成人員の変化をみても昔日の面影はない。教室開設時の昭和50年4月には教授、助教授、助手2、事務官1の5名がその全員であったが、現在では教官11、研修医7、大学院2、事務官2、研究助手3、総計25名の所帯に成長した。教室の診療は肝、胆、膵を主とする消化器外科全般を対象としているが、昭和54年度の疾患区分をみると入院総数289例、手術総数266例で、このうち胃十二指腸疾患は83例(31.2%)、胆道系結石症40例(15%)、結腸・直腸疾患38例(14.2%)、膵疾患18例(6.7%)、肝疾患・門亢症5例(1.8%)が主なものとなっている。外科治療の進歩は適応の限界に如何に立ち向かうかによってなされるものであり、それは多くの動物実験と技術の修熟によらねばならない。最近教室で取り組んだ問題として臓器機能再建に対する二つの試みがある。すなわち食道静脈瘤に対する門脈下大静脈吻合後の肝側門脈動脈化法と慢性膵炎手術後の遊離β細胞脾内自家移植術である。ともに術後の肝不全、重症糖尿病に対する肝機能あるいは膵内分泌機能の再建を可能とするものであり、多数の臨床例の追試が望まれている。

教室の研究活動についてはその一部が昨年NHKテレビにより紹介された臓器移植、限りなき延命計画などですでに御理解の方もあろうが、臓器移植をメインテーマに現在は臓器構成細胞の保存と移植に主力を注いでいる。すなわち肝細胞の脾臓内移植の成功は、生体内における補助肝臓の有用性を示唆するとともに肝細胞の分化、増殖過程の検索に有効な手段ともなっている。またこれらの技術は、膵β細胞の遊離、自家移植に応用されているのは前述のごとくである。さらに遊離肝細胞の凍結保存の研究は肝細胞を代謝ユニットとする人工肝の開発へとすすめられ、特に本研究は通産省人工臓器開発の特別プロジェクトとしても取り上げられている。

水戸教授がヨーロッパ実験外科学会の日本代表で有力メンバーであることにもよるが、海外との交流が多いことも教室の特徴として上げておきたい。教室開設以来の留学先はスエーデン・ルンド大学外科、アメリカ合衆国クリーブランドクリニック、およびデンバー大学外科の三施設があるが、この他西ドイツ・ボン大学移植外科、ケルン大学実験医学研究所とも交流があり共同研究を行っている。外国語による研究紹介と討論は消耗も多いが家族同伴の外人プロフェッサー招待パーティーでは教室員一同大いに張切り、留学の夢を育ませている。

招待教授　ルンド大学ベングマルク教授を囲んでの研究討論

たしかに診療、研究、教育でのスケジュールはぎっしり組まれ、一分の隙がない様であるが一度、学問の場を離れた場合は酒、スポーツ、マージャン、碁すべて制限されるものは何もないのも教室の特色であろう。よく学び、よく遊べが教室のモットーである。

（外科学第二講座　助教授）

課外活動報告

シリーズ　3

サッカー部

北医体　　高橋　康二

今年の北日本医科歯科サッカー大会は、11チームの参加のもとに5月31日、6月1日の2日間、旭医において開催された。この大会は、毎年250～300名もの学生が参加しているもので、大会の規模のみならず、旭医で開催される最初の大きな大会ということもあり、主管としての我がクラブも並々ならぬ責任を感じていた。大会準備も昨年の秋から早々と始められ、戸惑いながらも最初は唯大会を無事成功させたいということで無我夢中であった。しかし、グランド、宿舎の確保、サッカー協会への審判依頼、ポスター、パンフレット作製と頭を悩ませていた問題も次第に片付いていき、大体の大会の目途も立って来る頃になると、「何如にして大会を無事終えるか。」ということ許りが話し合われていたミーティングの中で、「従来の大会の繰り返しに終わらせず、我々独自でより有意義な大会を作りたい。」といった意見が出て来るようになった。そしてそれは今迄の大会を振り返ることから始められ、その様な中で出て来たのは、「今迄の大会には、他校のチームと意見を交換し合う様な機会が殆ど無かった。」ということであった。それは10幾つもの大学の学生が集まるという貴重な機会を、単に試合だけに終わらせずにより有意義なものにしたいということで、確かに同じサッカーをする者同志、又医学を志す者同志、自由に話し合う機会を設けることが出来たなら、それは素晴らしいことだと思う。勿論どのチームにとっても、今回の様な大会は日頃の練習の成果を試す絶好の機会であるし、又試合に賭けている部分も大きいと思う。しかし大会が終われば、又即練習は開始される訳で、大会で得たものをその中により効果的にフィードバックしていく為にも、互いに練習、試合に関して意見を交換し合うといったことは、非常に有益であると思う。そこで我々は今回の大会で、そのきっかけとなる様なものを作りたいと考えた。しかし実際問題となると、極く限られた日程の中で全チームが一堂に会して話し合う時間を持つという事は非常に困難で、結局今回はアンケートという方法によって、互いに自チームの近況、日頃の練習内容、試合の戦評といったものを紹介し合う程度に止まってしまった。如何せん、アンケートでは一方的になってしまうことは避けられず、必ずしも満足のいく方法だったとは言えないが、我々の意図する所を、ある程度各チームに伝える事は出来たと思う。そして来年から、又各チームが真剣に取り組んでいくなら、北医体は我々にとって今以上に有意義な大会と変わって行くであろうし、又変えて行かなければいけないと思う。　　（サッカー部　責任者）

第6回医大祭

交流そして連帯

—80年代を俺達の手で—

55. 6. 12～15

第6回医大祭に寄せて　　長谷　秀之

第6回医大祭が終わって2か月余、無事に終わって安堵していると同時に、第7回医大祭への期待や不安がそろそろ芽生え始めてきた。1年の時模擬店で金魚すくいをして以来5年間、なんらかの形で大学祭に参加してきた。今振り返ると、思い出の1コマ1コマが走馬燈のように駆けめぐる。今年は特に実行委員長を務め、一層感無量であった。大学祭に参加してきてほんとうによかったと思う。

今思うに、私を大学祭に駆り立ててきたものは何だったのか、私たち学生にとって、大学は自分自身の生き方を見つけ、その生き方を実現できるだけの専門的能力を身につける場である。医科大学という性格上特に後者に

重点が置かれている本学において、大学祭はクラブ・サークルなどと共に、つきつめれば自分の生き方や生きがいを見い出しえる数少ない場である。しかし、私を動かしたのはもっと感情的なもののように思う。毎年大学祭が終わるごとに、ある程度の満足感と共にいくらかのさびしさやむなしさを感じてきた。大学祭とは、もっと楽しくもっと大きな可能性を秘めているものだ。高校祭の楽しかった思い出がある。大学と高校では学生の考え方や立場は違っても、燃えるエネルギーには違いがないはずだ。そう思って、昨年の11月から準備を始めた。とにかく今までにないような大学祭にしよう、多くの学生が大学祭を考え積極的に参加する、そういった大学祭を実現するため、方針案を作り、実行委員を増やそうとした。結果としては、上級生が少なく1年生が多くなった。これが大きな問題の1つである。例年よりも多くの企画を用意しようとしたが、責任者の数が足りず、上級生がいくつかの企画を兼任することになり負担が増す。新入生は何をしたらよいかわからず、このため仕事が思うように捗らない。そして、企画が遅れがちになってしまった。さらに1番大きな問題は、『大学祭とは何か－第6回医

大祭実行委員会方針案』で立てた方針案や行動提起が全体的に活かしきれなかったことである。もちろん、始めて買物公園やその他の場所で市民アンケートを行うなど評価すべき点も多い。しかし、大学祭に関するクラス討論が少なくかつあまり積極的に行われなかったことが、方針案を活かしきれなかった大きな原因であり、このことはひとえに大学祭実行委員の責任であったと思う。

私たち実行委員は、ただ単に大学祭を義務的に行うのではなく、大学祭の新たな方向性や可能性を考え、打ち出そうとした。結果としては、多くの問題点を残しあまり前進したとは言えないが、この試行錯誤がこれからの大学祭の在り方を考える上での礎となれば幸いである。個々の企画についての反省・評価は総括を出す予定なのでそれを見て頂くとして、最後に、今回の大学祭に参加しこれを支えてくれた人々に、心から御礼を述べたい。そして、大学祭がさらに発展していくことを願うものである。

（第6回医大祭実行委員会委員長）

第27回 北海道地区大学体育大会

第27回大会は、小樽商科大学が当番校となり7月11日から14日までの4日間、全道43大学から約4,300名が参加して開催された。本学からは10種目（女子弓道はオープン種目）に136名が参加した。

今大会は、準硬式野球 優勝、バスケットボール 準優勝、サッカー 3位、陸上競技6位（2年山本 1,500m 1位（道学生新 3′59″5）3年小黒三段跳1位）等、全種目に善戦健闘し、総合成績（男子の部）は6位であった。

（学生課）

第27回 北海道地区大学体育大会成績一覧

種目＼順位		1 位	2 位	3 位	旭 医 大
陸上競技	男	北 大	函教大	釧教大	6 位
	女	道女短	岩教大	函教大	
硬式野球		旭川大	道工大	北見大 北学園	
準硬式野球		**旭医大**	道都短	駒沢大 道自短	1 位
軟式庭球	男	旭川大	樽商大	道都大 道工大	
	女	札商大	道女短	旭教大 専修短	
バスケットボール	男	北学園	**旭医大**	旭教大 室工大	2 位
	女	道女短	函教大	札教大 旭教大	
バレーボール	男	旭教大	北学園	道自短 旭川大	決勝トーナメント 2回戦敗退
	女	道女短	武蔵短	岩教大 天使短	
サッカー		旭教大	北学園	**旭医大** 札医大	3 位
卓球	男	北学園	旭川大	樽商大 札商大	
	女	道女短	北学園	樽商大 栄養短	
バドミントン	男	函教大	学園大	札教大	1回戦敗退
	女	道女短	札教大	樽商大	〃
柔道		道都大	北学園	道都短 道工大	2回戦敗退
剣道	男	北学園	旭教大	酪農大 道工大	決勝トーナメント 1回戦敗退
	女	道女短	旭川大	帯畜大 酪農大	1回戦敗退
弓道（女子はオープン）	男	北 大	樽商大	札医大	11 位
	女	北星大	帯畜大	樽商大	7 位
ハンドボール		北 大	旭教大	樽商大	

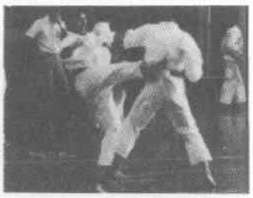
第23回東日本医科学生総合体育大会
〝陸上部ついに初優勝なる〟

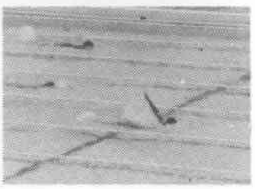
第23回東日本医科学生総合体育大会（夏季大会）は、千葉大学医学部が主管校となり7月21日(月)～8月7日(木)までの18日間にわたって行われた。

本学からは13種目に240名が参加、陸上競技部が大活躍し、（フィールド優勝、トラック3位）総合優勝の快挙を成しとげた。又、弓道女子個人戦で、第4学年の柿木文さんが、12射6中で優勝と、射技優秀賞を得た。本学の総合成績は34大学中24位、戦績等は次のとおり。

（学 生 課）

陸上競技 第2学年の山本長史君が、1,500mで4分4秒の大会新記録で優勝、5,000m、3,000mSCでも優勝、第3学年の小黒恵司君が、三段跳で14m23の大会新記録で優勝、110mHで優勝、走幅跳で2位、岡本範子さんが、女子100mで2位、第5学年の稲尾茂則君が、円盤投、やり投、砲丸投でそれぞれ3位であった。





準硬式野球
準々決勝進出 ベスト8

硬式庭球
男女共2回戦進出

バスケットボール
2回戦進出

柔 道
予選リーグ不通過

卓　球
予選リーグ不通過
バレーボール
予選リーグ通過　ベスト16
バドミントン
男子　1回戦敗退
女子　2回戦進出ベスト16
サッカー
2回戦進出　ベスト16

剣　道
予選リーグ通過　ベスト16
弓　道
120射　59中　5位
空手道
準々決勝進出　ベスト8
水　泳
5年の亀田　隆君が100m背泳、200m背泳で共に6位。

バレーボール講習会

6月28日(土)、午後1時から自己の健康管理およびバレーボールの技術向上を図ることを目的にバレーボール講習会が実施された。

講師6名による準備体操・トレーニング・サーブ・レシーブ・パス等の指導の後、講師のチームと本学バレー部のチームで試合が行われ実技の講習を終えた。実技講習終了後の懇談会では講師と学生の間で活発な質疑応答があり、17時20分盛況のうちに閉会した。　(学生課)

訃　報

昭和55年8月4日(月)、第2学年学生遠矢孝夫君(22才)が旅行中の高知県で川に車が転落し溺死しました。

遠矢君は私立六甲学院高校を卒業し、希望に燃えて本学に入学、熱心に勉学する一方サークル活動でも趣味を生かしてロック研究会に所属し活躍するなどバイタリティーにあふれた学生でしたが、志半ばで不帰の人となりました。

ここに謹んで遠矢君の御冥福をお祈りします。

(学　生　課)

窓　外

笹　森　秀　雄

俗　　信

明治以後の教育が最も力を注いだことの1つに、「迷信打破」があった。広辞苑やその他の辞書によると、本来「迷信」とは、「民間に行われている信仰・慣習のうち、とくに社会に対し害毒を及ぼすもの」とあり、たとえば、病気が直ると信じてお札の類を飲んだり、またきつねつきの信仰などがその典型例とされている。

われわれが農山漁村を歩いてみると、そこには都市で生れ育った人々から「迷信」として一笑に付されるような「言い慣し」がまだたくさん残っており、それが今なお農民や漁民の生活に生きている場合が少くない。そのなかには、現代の科学的知識からみて明らかに矛盾があり、またそれ故に否定されなければならないものも多いが、しかしわれわれが「俗信」とか「言い慣し」とか呼んでいるもののなかには、単に「迷信」とか「邪信」とかいって頭から否定してしまうには惜しく、いま一度考えてみてはどうかと思われるものも幾つかあるような気がする。

「俗信」は気象・生業・出産・結婚・病気・葬式など生活の多方面にわたっており、その叙述形式は例外もあるが、多くは「何々するな」「何々すると何々になる」という2つの型に大別されるようである。前者の場合は単に禁止の意のみを表わしているが、後者は禁止を犯した場合の制裁や報を伴っているのが特徴である。例えば、「北向きに寝るな」「ご飯に箸を立てるな」「箸渡しをするな」「窓から出入りするな」などは前者の例であり、また「夜爪を切ると親の死目に会えぬ」「嘘をつくと口が曲る」「囲爐裏をまたぐと腰がぬける(またはバチがあたる)」「帯を枕に寝ると長煩いをする」「妊婦がカマスに座ると難産する」「物差しを折ると命が縮まる」「ご飯をそまつにすると目が潰れる」「沖で猿の話をすると魚がいなくなる」「小豆飯に味噌汁(お茶)をかけて食うと雨が降る」「みみずに小便をかけるとチンポがはれる」などは後者の例である。しかし前者においても、よく考えてみると、その背後にいろいろな制裁や注意が暗示されている場合が多い。

「俗信」とか「言い慣し」といわれているもので、今なおわれわれ都市人の生活に生き残っているのは、「佛滅の日に結婚式を挙げるな」「友引の日に葬式を出すな」など、せいぜい2、3のものにすぎない。農山漁村に比較すると、都市ではこの種のものの消滅が極めて急速のようである。

「俗信」とか「言い慣し」といわれているもののなかには、われわれの常識からみて不行儀とか不愉快とかの感を抱かしめるものが多く、したがってそれを禁ずるため、あるいは注意を喚起するため、強いて制裁や報を加味して子孫に伝えてきたのが、この「俗信」や「言い慣し」の一要素ではないのか。とすれば、「迷信打破」は近代化の道として当然の所作であるとしても、たまにこの消滅しかけている「俗信」や「言い慣し」について、その社会的意義や効用を考えてみるのも、あながち無意味ではないのではないか、と思う昨今である。

(社会学　教授)